

国際交流センターだより vol.9

海外リサーチクラークシップ研究成果報告会を開催しました

7月17日、「海外リサーチ・クラークシップ研究成果報告会」を開催しました。2019年度に海外の研究施設に研究留学した医学科5年生11名（うち1名は留学先国の情勢により留学中止）が、帰国後も継続してきた研究成果を報告し、学業と研究活動を両立する日々で成長した姿を披露しました。報告会終了後には表彰式が行われ、嶋医学部長より最優秀賞と優秀賞が授与されました。



MESSAGE

国際交流センターセンター長
嶋 緑倫（医学部長）

今年度の報告会では11名の学生の皆さんの発表がありました。短いプレゼン時間でしたが、それぞれ研究の内容を工夫してうまくまとめており、学生とは思えないまさに研究者レベルの発表で感心いたしました。また、質疑応答も立派でした。国際マインドと研究マインドの醸成は本学の教育方針の中でもとても重要視しています。この経験をもとに、医師になってからも研究マインドを忘れず、国際的に活躍できる医師、研究者をめざしていただきたいと期待しています。

国際交流センター副センター長
森 英一朗（未来基礎医学准教授）

この研究成果報告会では、熱のこもった発表や質疑応答が行われ、彼らがまだ学生であることを忘れさせてくれます。内容は非常に多岐に渡りますが、彼らに共通しているのは、先人の積み上げてきた研究成果に基づいて、それらを発展させていっているプロセスを、しっかりとかみしめ、楽しんでいるところでしょう。この学生時代の経験を、今後のキャリアに繋げていけるよう期待するとともに、プログラムとして継続的に支援していけるよう取り組んで参ります。

研究部長
吉栖 正典（薬理学教授）

今年で海外リサーチ・クラークシップの研究成果報告会も4回目になりました。もともとリサーチ・クラークシップは、以前にあった研究室配属実習をさらに充実させようと、車谷前医学部長が主導されて、私が基礎教育部長の時に始まったものでした。実習期間も1ヶ月から3ヶ月に延長されたのですが、せっかく期間が延びるのなら学生さんに海外で研究を経験してもらおう機会にもしようと考え、学内の教授の先生方を中心に伝手のある派遣先を紹介していただいたのが始まりでした。研究成果報告会は彼らが海外に出てから2年後に行われますが、いつもこの間の彼らの成長に驚かされます。ここ2年のコロナ禍で海外での実習は中止となっていますが、また近く再開されるでしょう。その時には多くの学生さんが手をあげてくれることを期待しています。

基礎教育部長
堀江 恭二（生理学第二教授）

本年度も、昨年度に続いて、甲乙つけがたい審査委員泣かせの発表が目白押しでした。医学生としての多忙な日々の中で着実な研究成果を挙げていることに、感心することしきりです。きっとこれは氷山の一角であり、発表者の方々以外にも、様々な分野で高みを目指している学生さんが多くいることだろうと思い、若い力を頼もしく感じました。最後に、学生さんを日々ご指導いただいている先生方へ、厚く感謝申し上げます。

教養教育部長
酒井 宏水（化学教授）

本年も海外リサーチ・クラークシップの研究成果を拝聴させていただきました。皆さんが堂々と発表し、質疑応答している姿に、自身が留学先から帰国した当時のことを重ねていました。学会発表、論文発表にまで到達した完成度の高い研究成果もあり、皆さんの努力の賜物であることは勿論、ご指導くださった先生方の貢献も相当なものであったらと拝察します。今後もぜひ研究マインドを持続し研究を発展していただきたいと思います。

最優秀賞

医学科 5年 竹下 沙希 (公衆衛生学)

レセプトビッグデータのクラスター解析によって明らかになった高度肥満の不均一性

後輩には、ぜひ積極的に海外で学んでほしいです。私は COVID-19 が流行しはじめた時、実験の合間に感染者数の動向をチェックする研究室のメンバーを見て公衆衛生学に興味を持ちました。成果を報告した研究は、高度肥満集団が臨床的特徴によって複数のクラスターに分かれ、処方内容や合併症に明確な差があることをレセプトデータから示したものです。今後は、肥満患者に対する医療の発展に貢献できるように研究を進める所存です。これまでの研究に関わってくださった全ての方々に感謝申し上げます。

( Columbia University Medical Center / アメリカ)



優秀賞

医学科 5年 時永 志帆 (循環器内科学)

GRK2 と CS1 急性心不全のメカニズム

この度は優秀賞を授与していただき、誠にありがとうございます。海外リサーチ・クラークシップを通して、研究の重要性や研究に対する積極的な姿勢を学ばせていただきました。また、帰国後の研究活動では循環器内科学教室で、様々な実験手技や研究に必要な考え方を指導していただき、日々研究に取り組んでおります。この数年間で学んだことを今後に活かしていけるよう精進したいと思います。改めて、ご指導・ご尽力いただきました皆様に感謝申し上げます。

( Young Loo Lin School of Medicine, National University of Singapore / シンガポール)



優秀賞

医学科 5年 森 祐貴 (精神医学/発生・再生医学)

Nicotine may ameliorates social dysfunction induced by early-life adversity through anti-inflammatory effects in mice

この度は優秀賞をいただき、誠にありがとうございます。今回の受賞は、これまでお世話になりました皆様のおかげであると実感しております。海外リサーチに参加したことで出会った方々、得られた経験が今の自分に大きな影響を与えたことは間違いありません。後輩の皆様も、是非挑戦して知見を広げて頂ければと思います。

研究者としてはまだまだ駆け出しではございますが、今後も医学の発展のためにより一層邁進してまいります。

( Massachusetts General Hospital / Harvard Medical School / アメリカ)



発表学生一覧 (氏名・所属研究室・発表演題・留学先)

若山勝紀 (薬理学)	重症 COVID-19 患者における血清 cell-free DNA レベルの上昇 ( Medical College of Georgia, Augusta University / アメリカ)
山田 愛 (未来基礎医学)	AlphaFold を用いた URAT1-dotinurad 複合体の構造予測 ( University of Alberta Hospital / カナダ)
喜多真由 (分子病理学)	Role of mitochondrial creatine kinase in colon cancer cells (クレアチンキナーゼの大腸癌細胞における役割について) ( University of Alberta / カナダ)
原田安美 (未来基礎医学)	マウス視床下部細胞での Ghrrh、Sst、AgRP、SF-1 発現細胞のアドレナリン受容体の発現 ( University of Texas Health San Antonio / アメリカ)
二川真由 (未来基礎医学)	ATR 阻害剤によるがん細胞の温熱感受性増強についての検討 ( University of Texas Health San Antoni / アメリカ)
洪 永鎮	My individual conception on the future plan ( Department of Biomedical and Neuromotor Sciences, University of Bologna / イタリア)
東谷優輝 (第二生理学)	ゲノム編集による conditional allele 作製の効率化に向けた意図しない組換え様式に関する long-read sequencing 解析 ( Hong Kong Polytechnic University / 香港 [留学先国の情勢により中止])
山田航大 (循環器内科学)	たこつぼ症候群発症メカニズムに関する研究 ( Cincinnati Children's Hospital Medical Center / アメリカ)

国際交流センターだより vol.9

「第4回 英語で学ぶ医学・看護学WEBセミナー」を開催しました

8月2日、医学科6年生を主対象に、オレゴン健康科学大学・IVR科の堀川 雅弘 先生を講師にお迎えし米国臨床留学についての講義が行われました。講義は二部構成からなり、第一部は臨床留学へのステップとなるUSMLEについての最新のアップデート及び専門家として臨床留学を目指す際の戦略を日本語で、第二部は自身のキャリアの歩み及び診療哲学を英語で講演いただきました。



オレゴン健康科学大学・IVR科 堀川 雅弘

Nothing is impossible. Never give up. These phrases could be somehow cheap ones for some people; however, they were NOT for me in the middle of the difficulty of my career. Working in a different country with completely different language and culture is not easy. Then, why? Why should you pursue the different career path? —You don't have to. It's all the same for your entire career. You just have to determine your careers by yourselves. There will be a lot of uncontrollable factors affecting your career choices: lots of chance encounters and some good and bad lucks. Regardless, it's eventually you, that is going to determine your own careers. Never waste your precious time by blaming somebody else and/or whatever you cannot control. Focus on whatever you can control, do your best efforts, and be prepared for grabbing your best fortune. Lastly, be great doctors, together.

放射線診断・IVR学 教授 田中 利洋

英語で学ぶ医学・看護学セミナーは、国際医療人の育成を目指した本学の授業プログラムです。今回の英語セミナーは、授業の中で英語に触れてもらうという目的以外に、海外でのキャリアパスを意識して頂きたいという思いで、主に医学科6年生を対象に企画しました。講師として現在米国オレゴン州のOregon Health and Science University (OHSU) で臨床医として勤務しておられる堀川雅弘先生をお招きしました。堀川先生は、私と同じくIVRに魅せられ放射線科医になり、卒後7年目に渡米し、自力で現在のポジションを獲得されました。OHSUは、まさに世界のIVR発祥の地であり、本学附属病院長の吉川公彦先生も留学されていた施設です。堀川先生は2012年にOHSU放射線科のKaufman教授が当講座を訪問された際に吉川先生のお計らいで対面され、その後に受け入れを直談判されたそうです。ご講演では、このような自ら道を切り開く力や異国の地での苦労を苦労と感じない前向きな姿勢を教えてくださいました。本講演に刺激を受け、海外に羽ばたくきっかけとなることを期待しています。



学生の声

医学科6年 奥村 由紀

この度のセミナーを受け、医学・看護学を学ぶ中でも英語に触れる機会があることは非常に貴重なことだと思いました。日本にいと英語を使う必要はほとんどなく、自主的に英語を使う機会を設ける必要があります。そのため、特に大学生の時からこうして授業などの一環として英語に触れる機会を設けてくださることは非常にありがたいと感じました。さらに学生が英語で質問をすることで、学生同士が互いに刺激を受けることができるのではないかと思います。



医学科6年 渡部 開智

私をはじめ、多くの同級生が海外での臨床留学に興味を持っておりますので、堀川先生の講義は自身の将来の医師像を考えるうえで非常に興味深く、刺激的でした。臨床留学に関しては海外への純粋な憧れもありますが、堀川先生の話の中でもあったように、日本での数年分に相当する症例数を海外では1年間で経験できる点は、早く1人前になることができるという点で大きな魅力のように感じました。この刺激を忘れず、勉学に励みたいと思います。

